

(6)15-5地区

15-5地区は15-4地区の東に設定した調査区である。調査区では上層遺構として掘立柱建物跡群や土坑・性格不明のピット・溝を、下層遺構として弥生時代の竪穴式住居跡や木棺直葬墓を検出した。遺構密度は希薄である。

1) 弥生時代の遺構・遺物

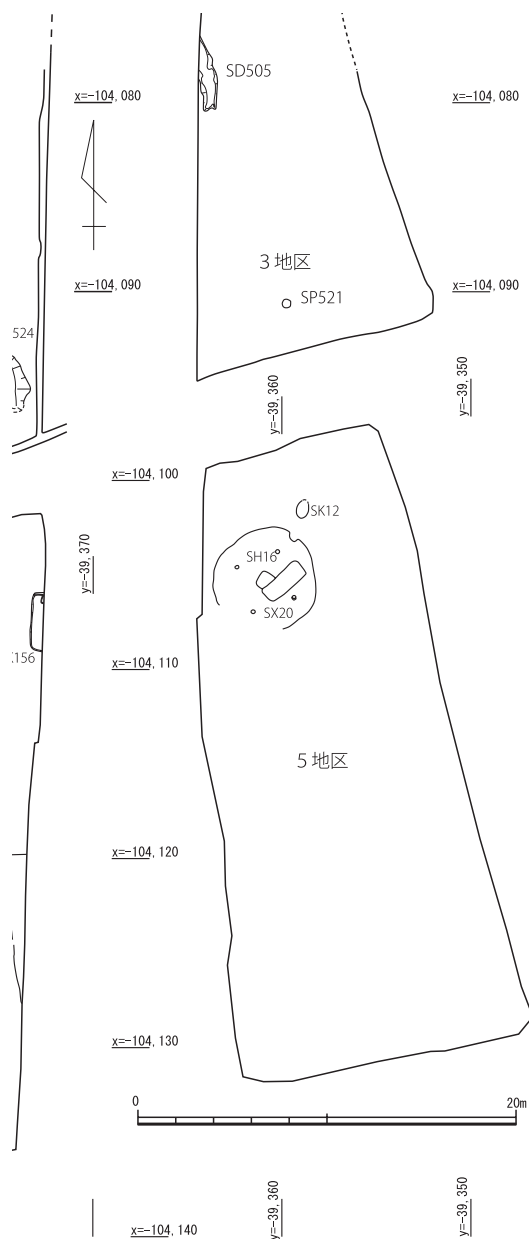
A. 検出遺構

弥生時代に属する遺構として木棺直葬墓1基、竪穴式住居跡1基を検出した。遺構密度は他の地区に比して薄い。

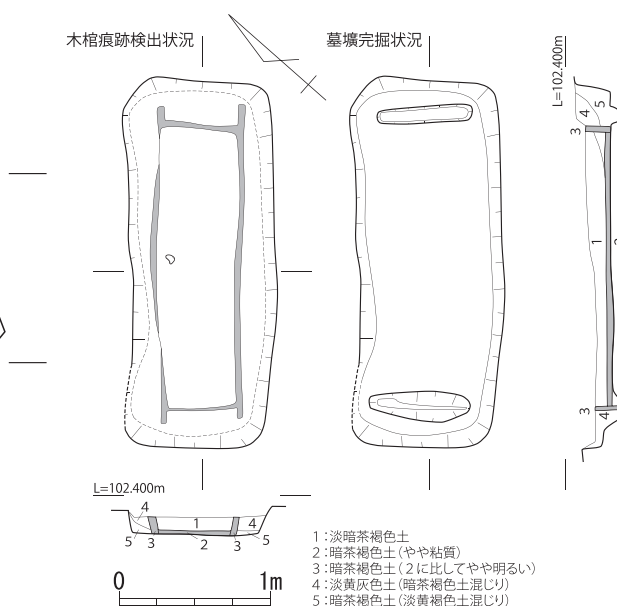
木棺直葬墓 S X20 (第117図) 調査区北側で検出された東西方向に主軸をもつ木棺直葬墓である。

この遺構周辺には、竪穴式住居跡や廃棄土坑と思われる遺構以外に、溝などの区画を示す遺構は検出されておらず、無区画の木棺墓であると考えられる。

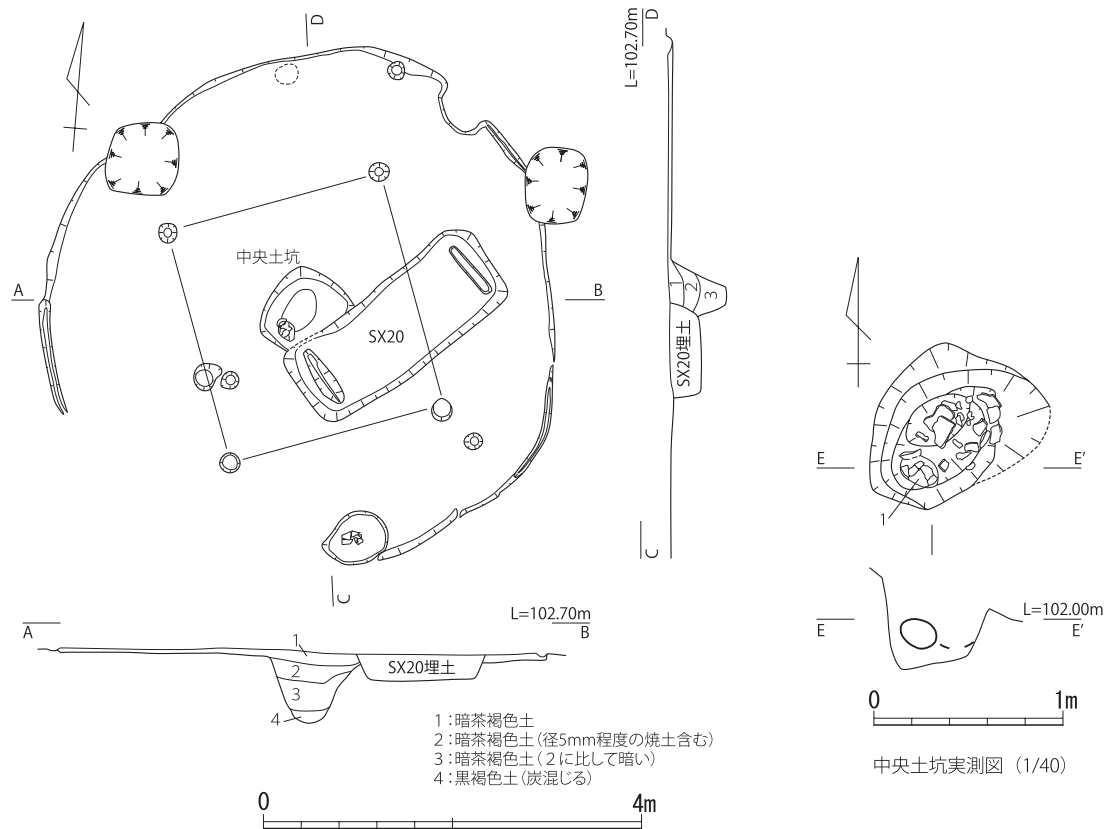
墓壙の平面形は長方形プランを呈し、全長2.5m、幅0.95m、深さ0.2mを測る。棺は墓壙を5cm掘削した段階で棺の痕跡を確認することができた。棺の形状は、組合式箱型木棺であり、長側板が小口板を挟み込む形状をとる。また、小口部分は、墓壙底面に掘削された小口板固定用の掘形に固定している。東側では、土圧のためか、棺の痕跡は小口板固定用の掘形より南側に寄って検出された。底板の有無や形状については明



第116図 4地区検出遺構配置図
(弥生時代、1/400)



第117図 木棺直葬墓 S X20実測図(1/50)



第118図 竪穴式住居跡 S H16実測図

らかにできなかった。木棺の規模は内法で長軸1.9m、短軸0.5mを測る。なお、北側の幅が広いことから、北側に頭位をもつものとする。

墓壇埋土中、木棺の腐朽に伴う落込み土の中から弥生土器の小片が検出された。

なお、この木棺直葬墓は、竪穴式住居跡 S H16の中央土坑を切っており、住居廃絶後に構築された木棺墓であることが明らかとなった。

竪穴式住居跡 S H16 (第118図) 4地区北部で検出された円形の竪穴式住居跡である。住居の遺存状況は悪く、深さは床面まで7cmのみ遺存していた。

住居の平面形は径5.4mを測る円形プランを呈する。住居北東部分には、壁面に沿って幅0.6m、住居内側に0.3m突出する掘り残しがあり、正円形は呈さない。周壁溝は部分的に検出され、完周するものではない。支柱穴は4基を特定した。直径20～30cm、深さ20～38cmを測る。住居の中央には中央土坑が検出された。一辺0.8mを測る不整な方形を呈し、埋土中には炭が混入していた。土坑内からは無文の広口壺 (第119図1) 1個体が横位で検出されたほか、多数の細片化した弥生土器が検出された。木棺直葬墓との切り合い関係から、この地区周辺では、集落が形成され、集落の廃絶もしくは移動時に墓域として土地利用がなされたことを示す好資料といえる。

S K12 竪穴式住居跡 S H16の北東で検出された長軸約1m、短軸0.6m、深さ15cmを測る楕円形の土坑である。埋土中から細片化した弥生土器が出土している。遺構の性格については廃棄土坑の可能性が考えられる。この周辺まで集落としての土地利用がなされていたことを示す資料

といえる。

(岩松 保・石崎善久)

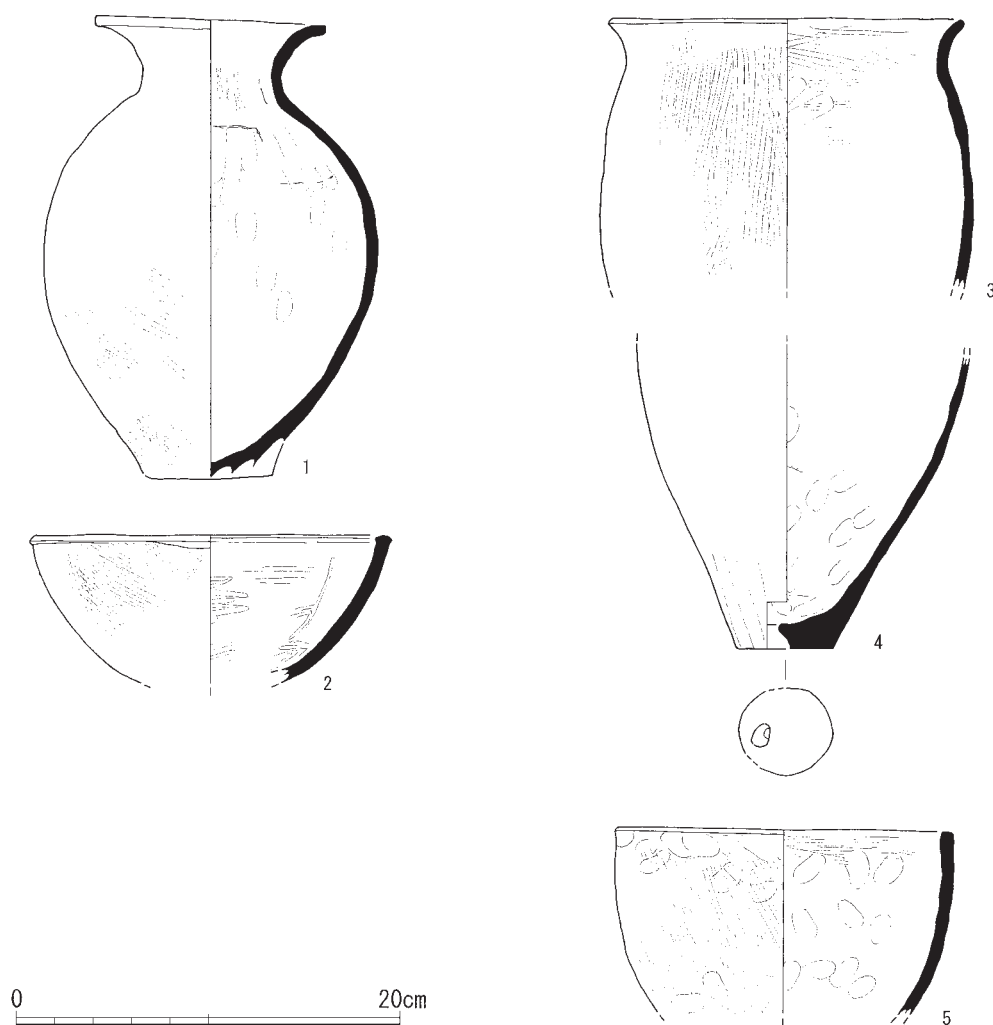
B. 出土遺物(第119図)

5地区出土遺物として、竪穴式住居跡S H16およびS K12から出土した弥生土器を図示した。

竪穴式住居跡SH16(第119図1・2) 住居跡中央の土坑から出土したものである。1は、無文の広口壺で、ナデ及びミガキ調整が施される。2の鉢にも、内面にミガキ調整がみられる。他の遺構出土の土器と比較して、きめの細かい胎土をもち、堅く焼き上げられている。

土坑SK12(第119図3～5) 3は、ゆるく折り曲げられた口縁をもつ甕である。4は甕底部であるが、底面が小さくやや不安定である。底面に穿孔のようなものをもつ。5の鉢は、直口の深いものである。作りが粗い。

(谷上真由美)



第119図 L 5地区出土遺物実測図(1)

2) 奈良時代以降の遺構・遺物

A. 検出遺構

15-5地区では、奈良時代以降の遺構として、掘立柱建物跡2棟、溝などを検出した。遺構密



第120図 5地区検出遺構配置図(奈良・平安時代、1/400)

度は1地区などと比較すると希薄である。

掘立柱建物跡SB5-01(第121図) 調査区北部と3地区にまたがって検出された南北軸の掘立柱建物跡である。一部の柱穴については、調査区外のため確認することはできないが、北に柱穴列が検出されないことから、南北方向の規模、構造の推測は可能である。ただし、西側に建物が展開する可能性は否定できない。主軸はほぼ真南北方向にとる。

建物の規模は東西1間(4.3m)、南北推定4間(10.8m)を測る。柱穴は平面方形を呈し、規模は一辺0.6~0.8m、深さ0.4m前後を測る。断面形は全て素掘りの形態を示す。柱痕跡の確認されたものから、径25cm前後の柱が使用されていたものと考えられる。

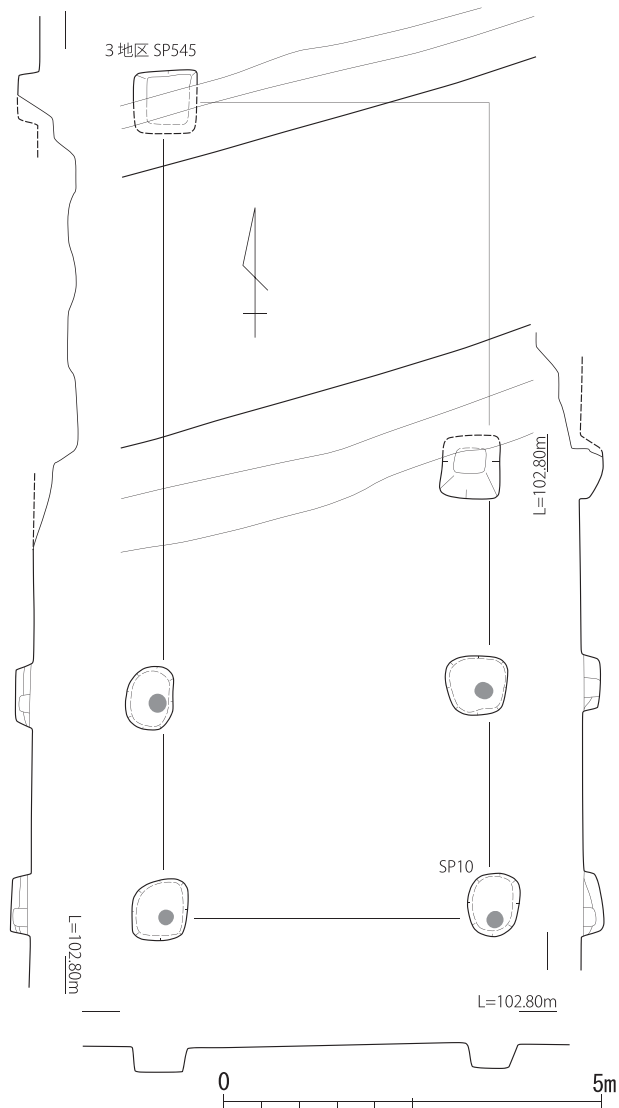
図示しうる遺物は出土していない。

柱列SB5-02(第122図) トレンチ北東部で検出された南北の柱穴列である。掘立柱建物跡になる可能性が高いが、後述するSD13の北側屈曲部分と軸を揃え、SD15の延長部に相当すること、さらに

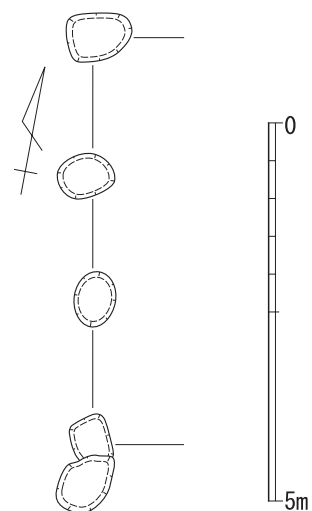
北側の柱穴やSD4などと併せて区画施設の一端を構成する柵の可能性もある。南北3間分(5.5m)を確認した。主軸は北から西に振る。柱穴の平面形は方形、もしくは楕円形を呈し、その規模は直径0.5~0.7m、深さ0.2m前後を測る。柱痕跡の確認されたものはない。

図示しうる遺物は出土しなかった。

SD13(第123図) 調査区南部で検出された東西方向の溝である。最大幅3.6m、最小幅0.6m、深さ0.3mを測る。主軸方位は真東西から東でやや北に振っている。溝は東側で北に屈曲する。平面的な形状から区画溝の可能性が高いと考える。4地区で検出された東西方向のSD30と一連の遺構である可能性が高く、ほぼ同一時期の遺物が出土している。遺物は埋土内から須恵器などが出土している。4地区のSD30は東端で立ち上がって終わることから、当初より、この



第121図 掘立柱建物跡SB5-01実測図(1/100)



第122図 柱列SB5-02実測図(1/100)

部分で途切れていたものと考えられる。この4地区のS D30と5地区のS D13との間の空間に門などの施設を想定することも可能かと考える。

また、その北側で検出されたS D15はS D13に沿うように掘削されており、厳密に同時性を検証することはできなかったが、関連する遺構である可能性が高い。

(岩松 保・石崎善久)

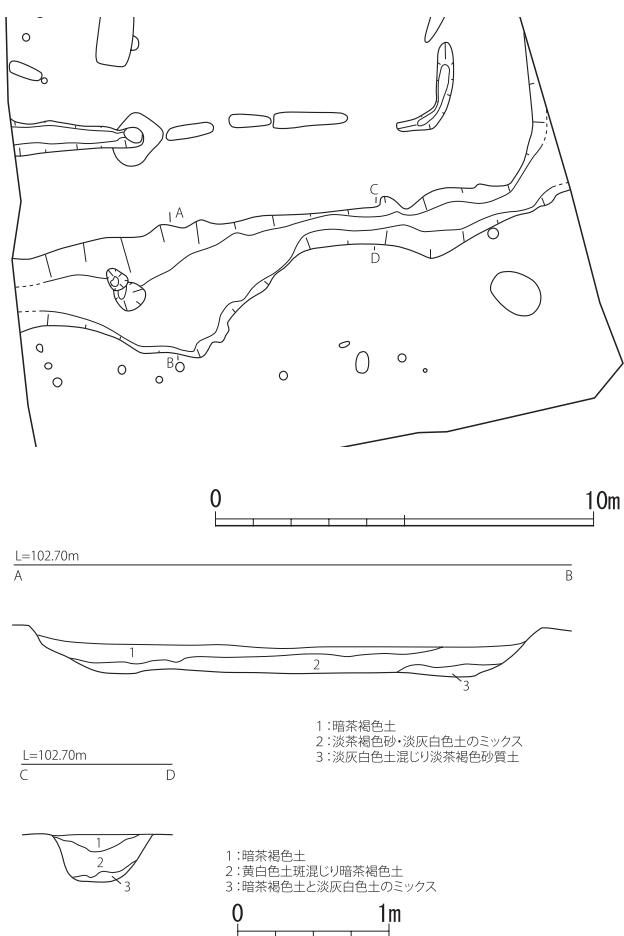
B. 出土遺物(第124図)

5地区出土遺物として溝、柱穴出土土器を図示した。遺物の総量は少なく、建物に伴うものも図示し得るものはない。

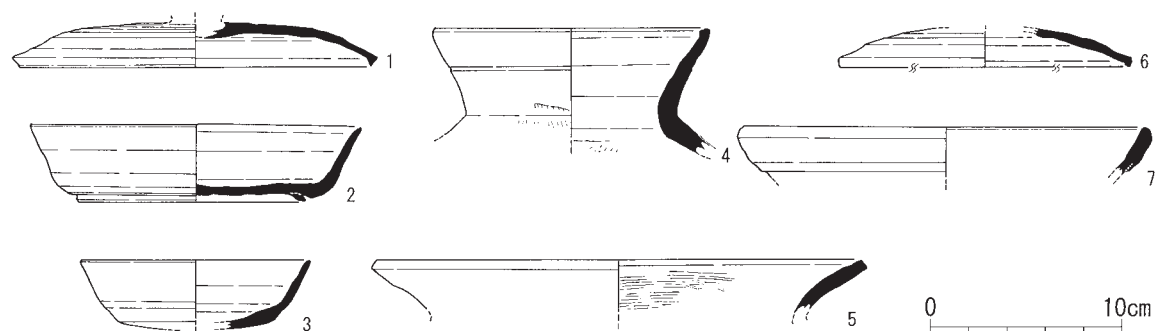
1～5はS D13出土遺物である。1は須恵器杯蓋である。2は須恵器杯Bである。高台は底部のやや内面にとりつく。3は杯Aであるが、丸みを帯びたやや古相を示すものとみられる。4は須恵器甕口縁である。短く内湾気味に立ち上がる口縁をもつ。やや小型品と考えられる。5は土師器甕である。口縁端部に面を形成する在地通有のものとみられる。これらS D13出土遺物は奈良時代後半のものと考えられる。時期的には4地区で検出されたS D30出土遺物との同時性を考えることができる。

6はS P19出土の須恵器杯蓋である。天井部は低い笠形を呈し、口縁端部を下方に折り曲げる。7はS P7出土の甕口縁片である。

(石崎善久)



第123図 S D13実測図(平面：1/200、S=1/50)



第124図 5地区出土遺物実測図(2)

2. 時塚遺跡第17次

(1) 調査経過

17次調査は京都府教育委員会の実施した第16次調査の北側、用水路により遺構の損壊する部分と、田面造成に伴い、遺構が掘削される部分を対象に地区を設定した。地区はL1～7地区の7か所を設定し、表土・床土の除去された地区から順次、人力作業を行った。調査前の現況ではL4地区が植木栽培に利用されており、その他は水田として、耕作がなされていた。なお、L7地区の北側に設けた調査時の排土置き場で、床土直下で遺構が露出していたため、平板による検出状況の記録作業のみを実施した。

現地調査は、調査第2課調査第1係係長小池寛、同主任調査員松井忠春、同専門調査員岡崎研一、黒坪一樹、同調査員石崎善久、筒井崇史、松尾史子が担当した。

調査は平成19年4月23日に着手し、各地区ごとに調査を進めた。

基本的な層序はこれまでの調査区と変わることはなく、表土・床土・クロボク層・黄灰色粘質土を基本とする地山の順である。17次調査ではL5地区にのみクロボク層の堆積が認められ、その他の地区にはクロボク層はみられず、地山面で遺構を検出した。

調査の結果、奈良時代の掘立柱建物跡群・古墳時代の群小古墳・弥生時代の方形周溝墓群など多様な遺構を検出することができた。また、群小古墳は京都府教育委員会・亀岡市教育委員会との協議の結果、新たに時塚4～14号墳と命名された。平成19年9月8日には現地説明会を実施し、約70名の参加を得ることができた。また、9月13日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。9月27日には全ての掘削・図化業務を終了し、撤収作業を行った。調査面積は4,320㎡である。

以下、各地区ごとに報告を行うが、遺構番号は各地区ごとに通し番号を付した。方形周溝墓は15次調査同様17-1号墓のように周溝墓を復原したうえで報告を行う。なお、17次調査では、原則として周溝墓の溝を墳丘中心から放射状に8地区に分けて調査し、遺物の取り上げを実施している。また、周溝墓の溝が分離する地区では便宜的に遺構番号を新たに付したものもある。掘立柱建物跡については複数の地区にまたがるものはないため、各地区ごとに番号を付して報告する。

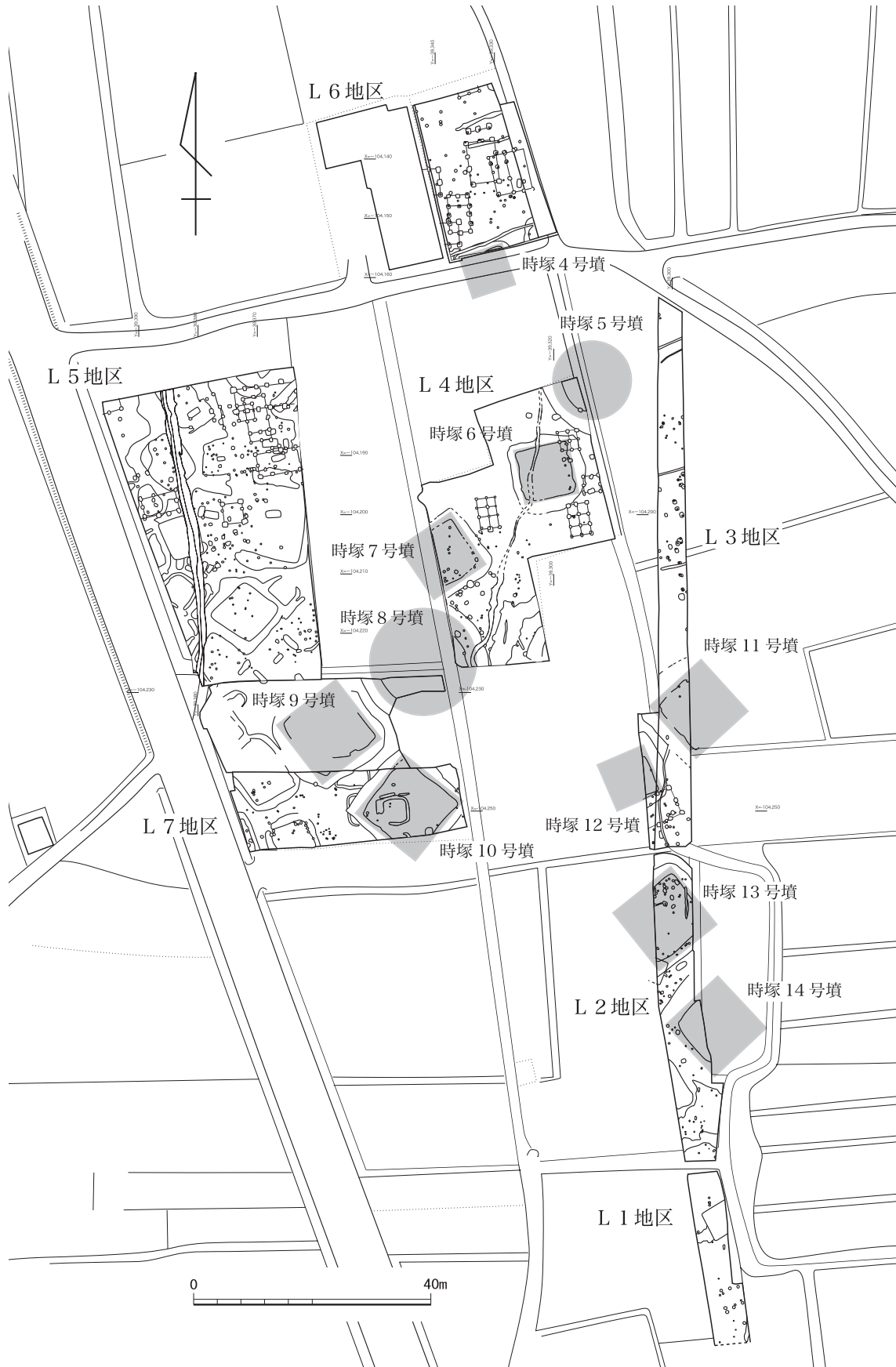
(石崎善久)

(2) L1地区

A. 検出遺構

L1地区は今回の調査対象地の中で最も南に設定された。京都府教育委員会の実施した16次調査地の北側に位置し、京都府教育委員会の調査区と連続する地区である。遺構はベース面上で検出した。古墳時代の竪穴式住居跡1基、時期不明の掘立柱建物跡1棟、不整形な弥生時代の溝などを検出した。以下、各遺構について述べる。

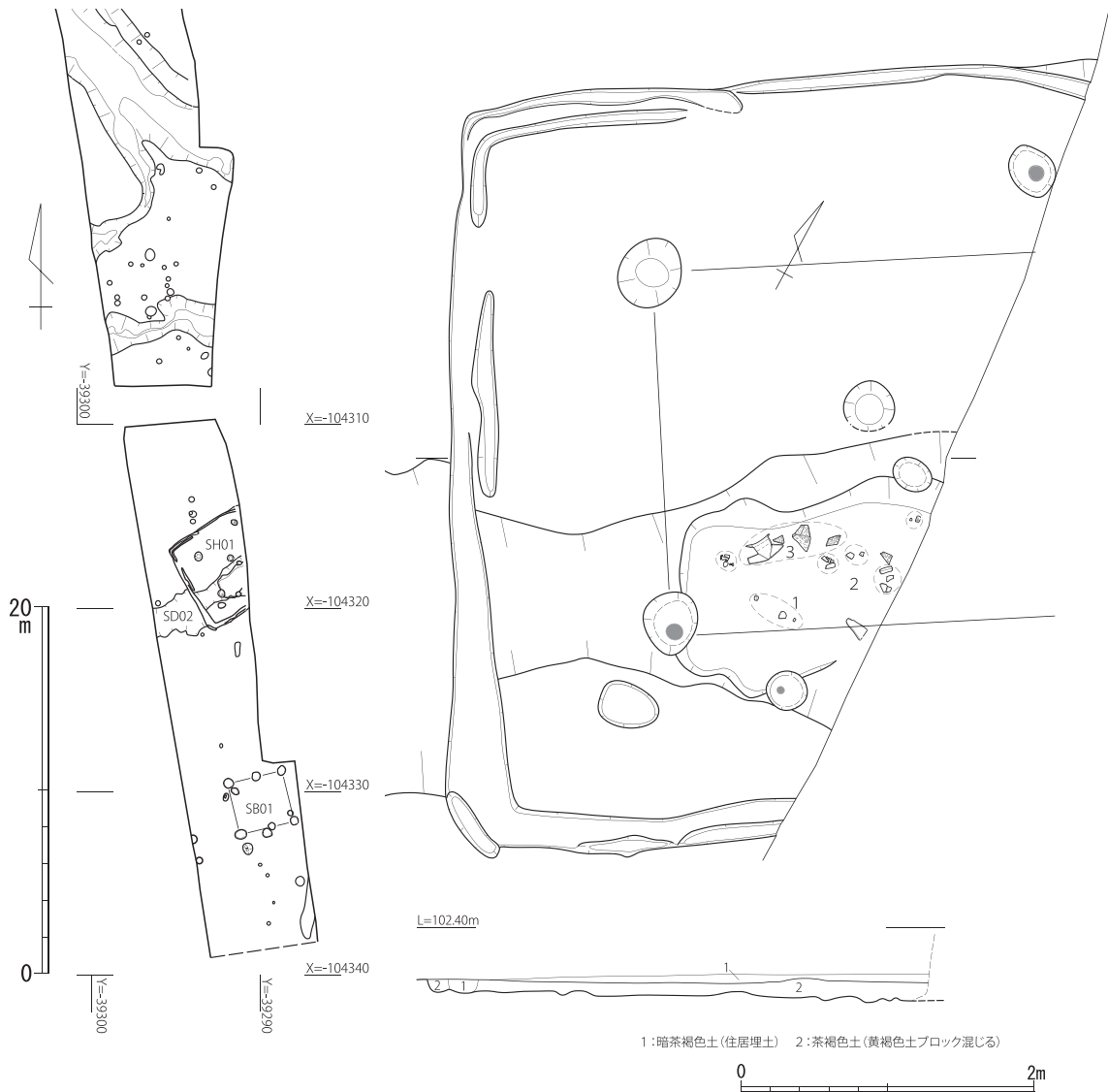
竪穴式住居跡SH01(第128図) 調査区の北側で検出した。東側の一部は調査区外となっている。平面は方形プランを呈し、規模は南北5.1m、東西4.3m以上、掘形の深さ0.2mを測る。住居内の施設として、支柱穴2基、周壁溝を確認した。周壁溝は住居内をほぼ完周するが、複数の溝



第125図 時塚遺跡17次調査区全体図(1/1,000)



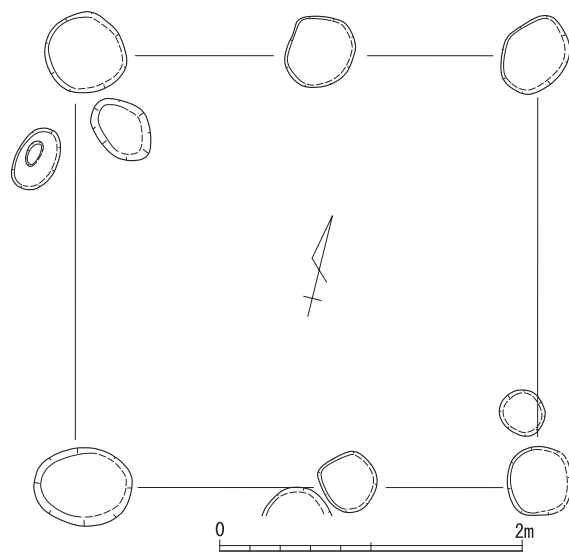
第126図 時塚遺跡17次調査区方形周溝墓復原図(1/1,000)



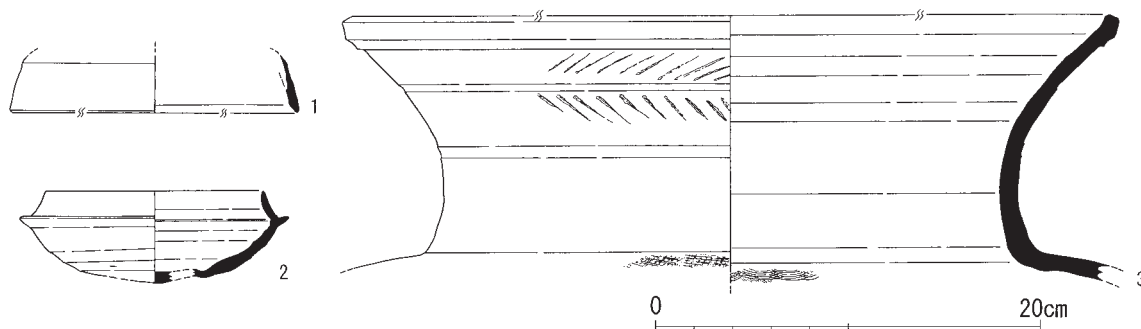
第127図 L1地区検出遺構配置図
(1/400)

第128図 竪穴式住居跡SH01実測図(1/50)

が掘削されている。主柱穴は北側のもので、径40cm、深さ50cmを、南側のもので径35cm、深さ50cmをそれぞれ測る。また、この住居では、須恵器甕(3)、須恵器蓋杯(1・2)などが住居の東側で検出されているが、いずれも、第128図2層上面で確認されている。また、2層はきわめて硬質であり、人為的な叩き締めがなされているものと判断された。この点からこの第2層は住居床面の整地層と考えることができ、この上面が生活面であると判断される。遺物はいずれも細片化しているが、古墳時代後期に属する。



第129図 掘立柱建物跡S B01実測図(1/50)



第130図 L1地区出土遺物実測図

掘立柱建物跡S B01(第129図) L1地区南で検出された東西2間(3m)、南北1間(2.8m)の掘立柱建物跡である。柱穴は径0.4~0.5mの円形で深さは0.2~0.3mを測る。出土遺物はないが、主軸方位が竪穴式住居跡S H01に近似することから古墳時代後期の遺構であると考えておきたい。

S D02 調査地北側で検出した不整形な東西方向の溝である。竪穴式住居跡S H01に切られている。幅1.6m、深さ0.17mを測る。弥生土器の小片のみが出土している。後述するL2地区のS D05とともに方形周溝墓(17-28号墓)を構成する溝であるとする。

B. 出土遺物(第130図)

L1地区出土遺物として、竪穴式住居跡S H01出土の須恵器3点を図示した。いずれも生活面と思われる硬化面状から検出されているため住居廃絶時に遺棄されたものとみられる。

1は須恵器蓋である、小片のため、口径や器高、傾きなどは明確ではない。口縁端部をやや内側に面をもつように整形する。天井部との境目の稜は退化し、ナデを利用して表現されており、ほとんど突出していない。2は須恵器杯身である。ほぼ全容をうかがうことができる。口径11.2cm、器高4.8cmを測り、やや丸みを帯びたプロポーションを呈している。口縁端部は丸く収められ、段を意識したような整形はなされていない。底部外面の回転ヘラケズリはやや雑であり、ケズリの範囲も狭い。3は須恵器甕である。復原口径39.2cmを測る。口縁をやや肥厚させ、外端面下方に稜を造り出す。頸部の装飾は2条の沈線を施し、上方の沈線を挟むように櫛状工具を利用した斜行刺突文を施文する。肩部外面には格子状タタキ、内面には青海波文がみられる。

これらの遺物は、杯身に丸みを帯び、深い体部をもつやや古い様相がみられるものの、蓋や杯身の端部の整形などから新しい要素がうかがわれるため、陶邑TK43型式に併行する土器群と考える。

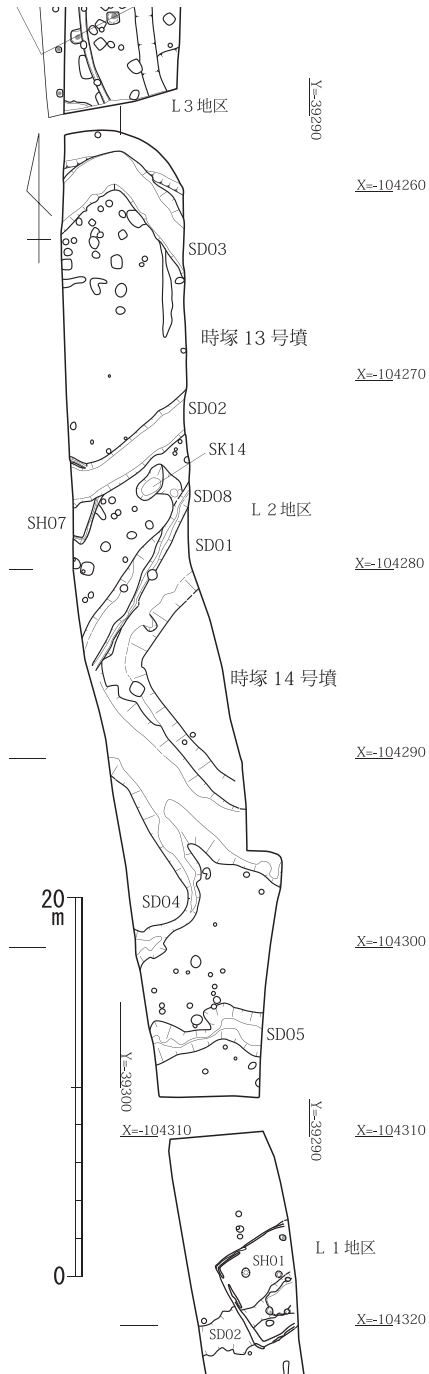
(石崎善久)

(3) L2地区

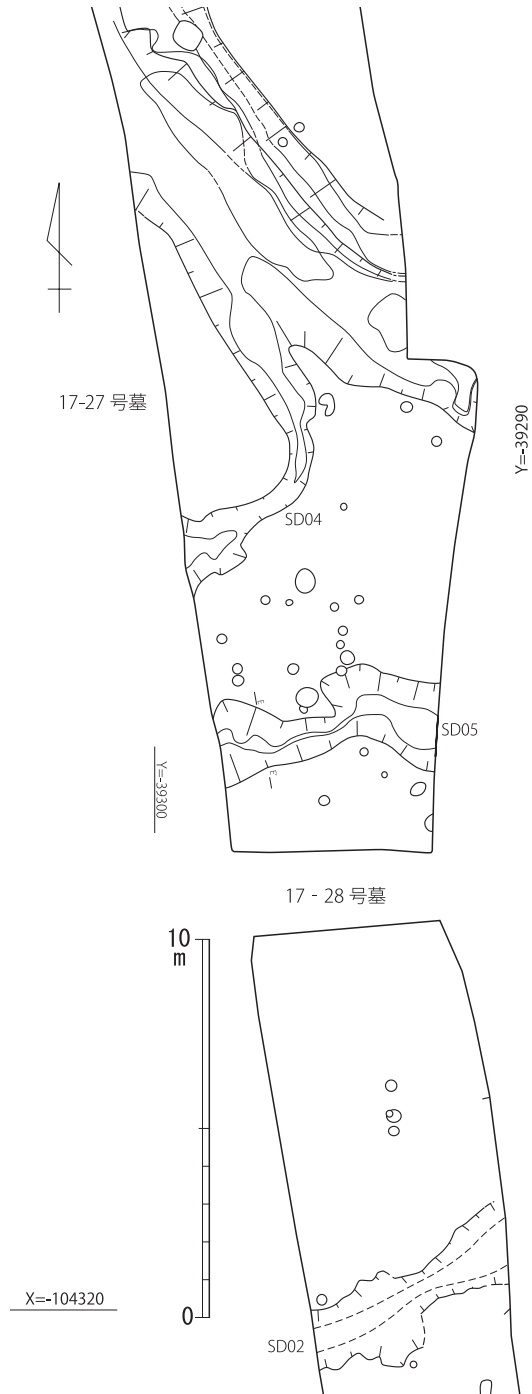
A. 検出遺構

L1地区の北に設定した南北に長い地区である。方墳2基と古墳時代の竪穴式住居跡1基、弥生時代の方形周溝墓2基(17-27・28号墓)などを検出した。また、複数のピットを検出しているが、建物として復原するには至らなかった。以下、各遺構の概要について述べる。

17-28号墓(第132図) L2地区の南で検出した不整形なSD05(幅2m、深さ0.2m)とL1地区で検出したSD02で区画される方形周溝墓である。表土および床土掘削段階での出土遺物であ



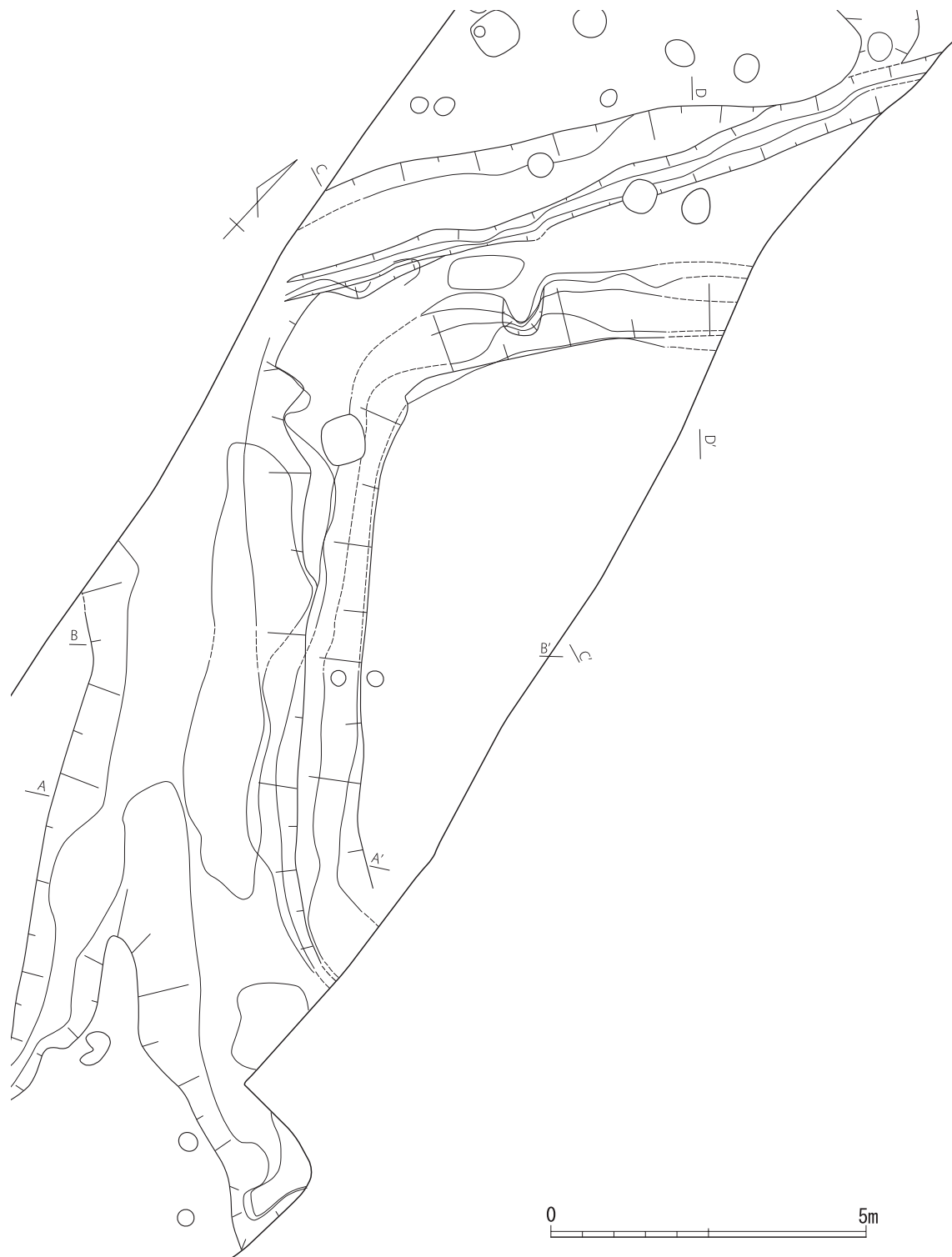
第131図 L2地区検出遺構配置図
(1/400)



第132図 L1・2地区方形周溝墓平面図(1/200)

る須恵器がこの周辺に置かれていたため、当初、古墳時代の溝と考えたが、溝埋土の遺物は細片化した弥生土器のみであり、L1地区で検出したSD02と併せて方形周溝墓を構成する溝と考える。周溝墓の規模は東西7m以上、南北15mを測る。周溝埋土中からは細片化した弥生土器が出土しているものの図示できる個体はない。

17-27号墓(第132図) L2地区西壁付近で検出された「L」字状に屈曲するSD04で区画さ

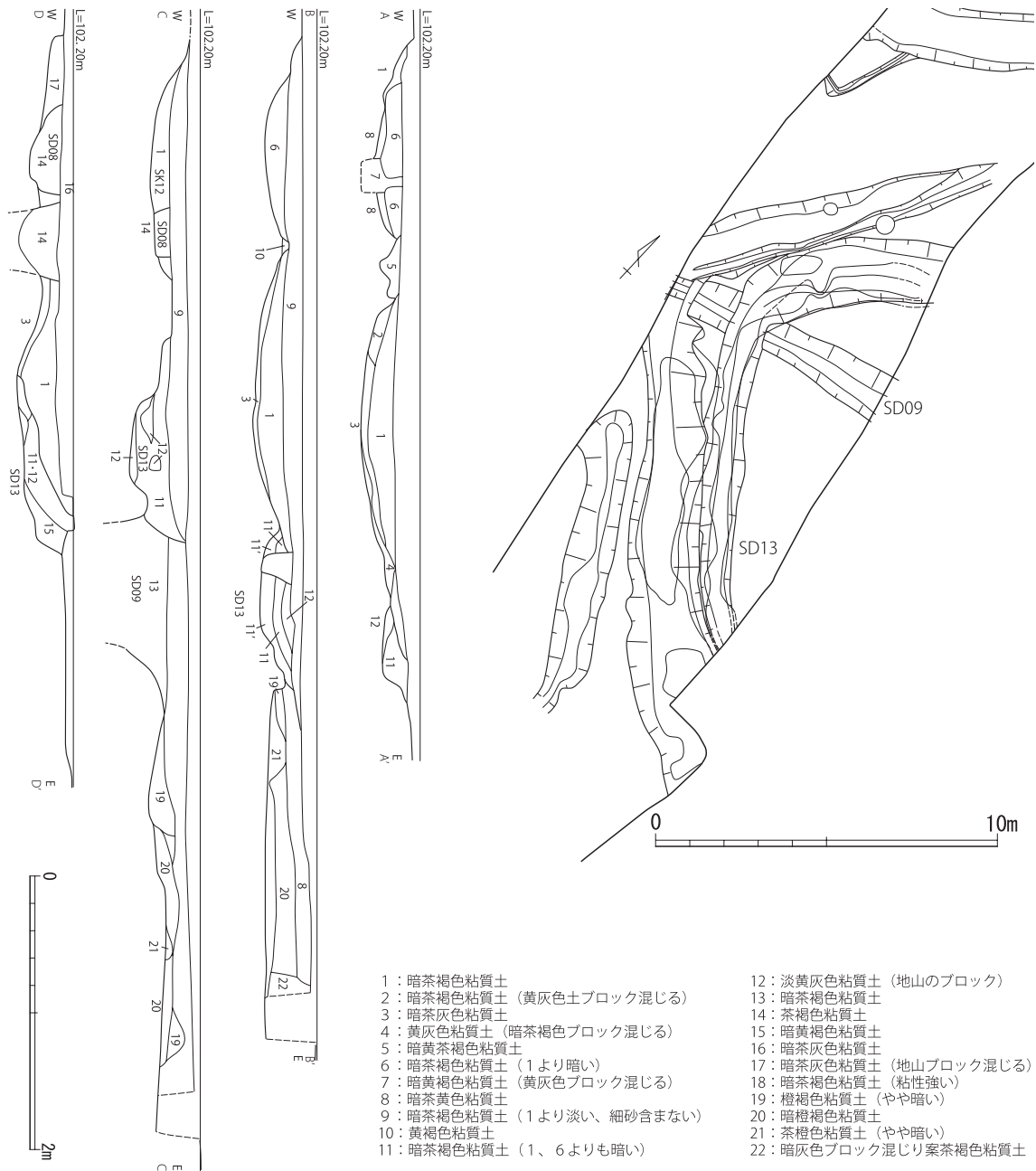


第133図 時塚14号墳実測図(1/100)

れる方形周溝墓である。時塚14号墳の周溝S D01に切られている。周溝の規模は東側で幅1.4m、深さ0.3m、南側で幅0.6m、深さ0.1mを測る。南側周溝の南東部は浅くなっている。周溝墓の規模は東西3.4m以上、南北8.4m以上を測る。

時塚14号墳（第133・134図） L2地区中央で検出したS D01を周溝とする方墳である。大部分が調査区外となっている。周溝は北側で幅3.5m、深さ4m、西側で幅3.8～4.2m、深さ0.4mを測る。基底部分での墳丘規模は南北11m、東西7m以上となる。西に主軸を振っている。葺石や埴輪などの外表施設、埋葬施設は確認されなかった。

時塚14号墳での遺物は周溝埋土内から須恵器・土師器（2～9）が出土したほか、墳丘南西部斜面から須恵器杯蓋（1）が転落したような状態で出土している。

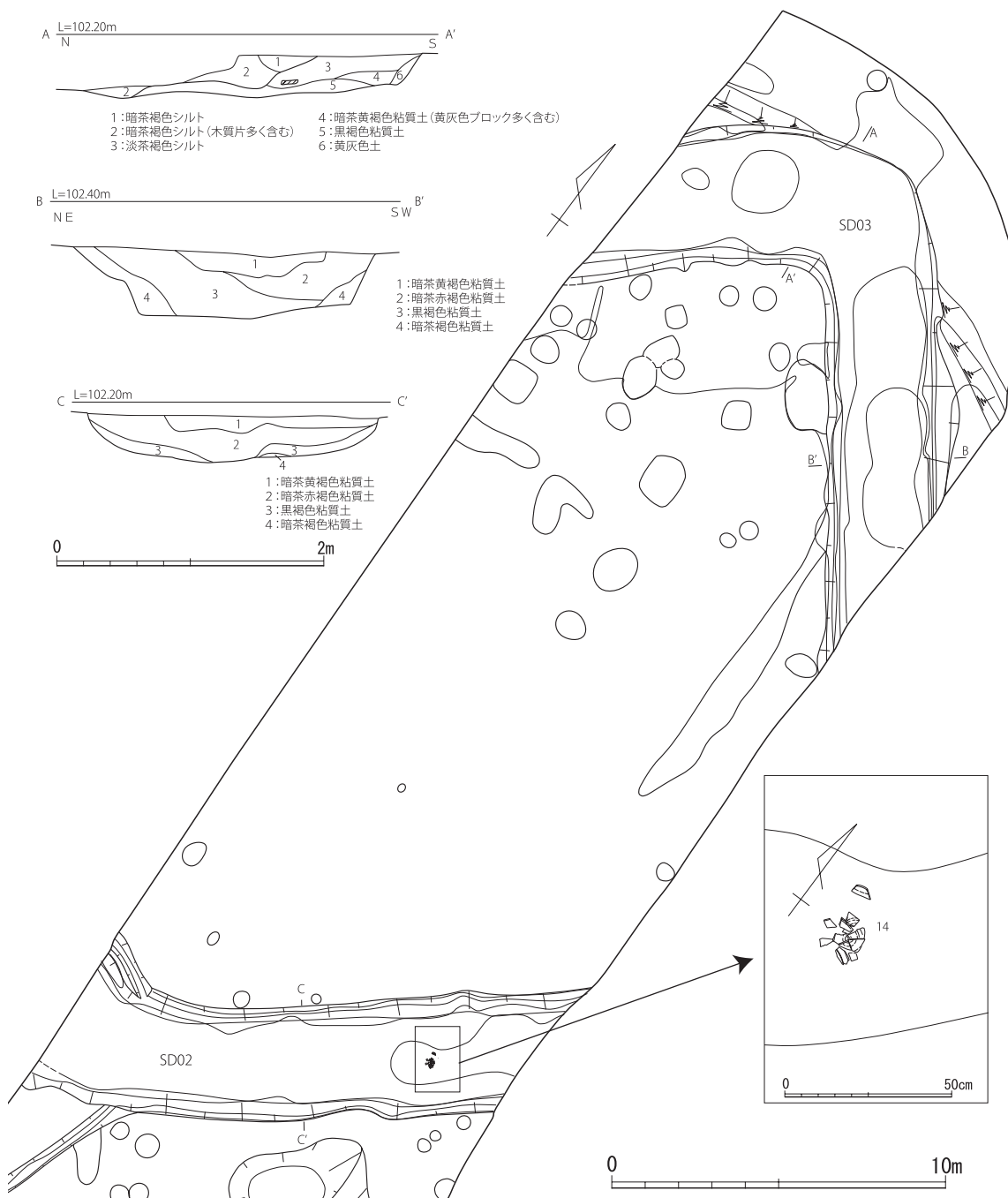


第134図 時塚14号墳実測図（盛土除去後平面：1/200、断面：1/50）

この古墳では、墳丘に盛土と思われる土色の変化が認められたため、これを除去したところ、墳丘に沿うように屈曲するS D13と、東西方向に墳丘中央を走るS D09を検出した(第134図)。周溝埋土の切り合い関係から、古墳築造時もしくはそれ以前の遺構であることは間違いない。

S D13は、墳丘南側では墳丘斜面に沿って掘削され、墳丘北側では周溝底面とほぼ同一面まで掘削されている。当初の墳丘裾である可能性があるが、あるいは古墳築造時の墳丘の計画線のような性格も考慮される。最大幅2m、最大深さ0.4mを測る。遺物は埋土中から土師器甕(11)が出土している。

S D09はS D13に切られており、また墳丘や古墳周溝とは無計画な方位を示し、ほぼ東西方向



第135図 時塚13号墳実測図(平面：1/100、断面：1/50、遺物出土状況図：1/20)

に調査区を横切っている。幅1.1m、深さ0.7mを測り、断面は逆台形に近い。遺物が出土していないため、時期については明らかにしがたいが、直接古墳に関連する遺構ではないものとする。

時塚13号墳(第135図) 時塚14号墳の北に位置するS D02と、S D03を周溝とする方墳である。周溝は北側で幅2m、深さ0.3m、東側で幅1.8m、深さ0.5m、南側で幅1.7m、深さ0.4mを測る。基底部分での墳丘規模は南北11.5m、東西11.5m以上となる。主軸はやや西に振っており、時塚14号墳とはほぼ同一の方向をとっている。葺石や埴輪などの外表施設は確認されなかった。また、埋葬施設も検出されなかった。

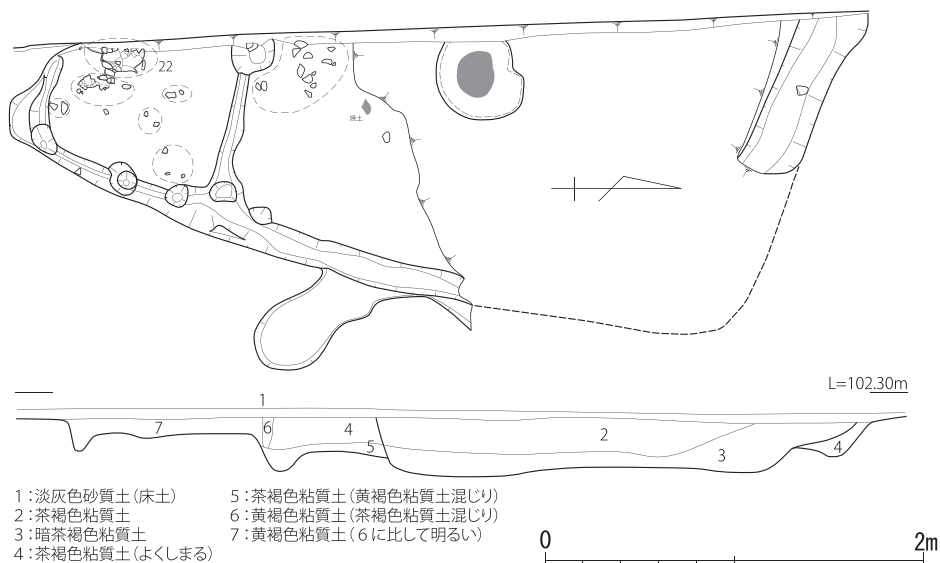
墳丘は地山で形成されており、削平のためか、盛土や埋葬施設を確認することはできなかった。また、周溝の北東側は近・現代の水路により大きく削平を受けている。

遺物はS D02埋土中から土師器が出土したほか、周溝中央の底面直上で須恵器杯蓋(14)1個体とその場で割れたような状態で検出された(第135図遺物出土状況図)。墳丘からの転落か、周溝外からの転落あるいは遺棄か明確ではないが、底面直上で検出されたことからこの古墳の築造時期を示すものであると考える。S D03埋土中からは須恵器平瓶(16)などが出土している。

竪穴式住居跡SH07(第136図) L2地区西側で検出された竪穴式住居跡である。時塚13号墳のS D02に切られており、大部分は調査区外のため、全容をうかがうことはできない。現状での規模は南北4m、東西1m井助、深さ0.24mを測る。

住居内の施設として、周壁溝および支柱穴と思われる柱穴を確認した。周壁溝はS D02により削平されている部分を除けば、完周する。また、住居の内側に東西方向に壁溝が分岐する部分がありこの面から北側は住居の床面が一段深くなっている。埋土の状況から住居の拡張が行われ、古い段階の住居に伴う周壁溝の可能性が高いものと判断される。また、カマドは検出されていないが、床面上から焼土が微量ながら確認されている。遺物は住居の南側を中心に土師器甕など、布留式段階の土器が出土している。

S D08 S D01を切って、北東から南北方向に斜行する素掘り溝である。埋土中から須恵器



第136図 竪穴式住居跡S H07実測図(1/40)

などが出土している。古墳時代後期に属すると考える。土層の観察から時塚13号墳の周溝が一定程度埋没してから掘削されたものであると判断される。

S K 14 S D08の北東で検出された長軸2.1m、幅1m、深さ0.3mの不整形な土坑である。S D08とは小規模な溝でつながっている。出土遺物がS D08と接合関係にあるため、両者で一連の遺構として機能していたものとみられる。

B. 出土遺物(第137図)

L 2地区出土遺物として、各遺構出土の遺物を図示した。遺構ごとに概観する。

時塚14号墳(1～10) 1は墳丘斜面から出土した須恵器蓋である。この古墳の築造時期を示す資料と考える。口縁端部は段を形成し、天井部の稜は比較的鋭い、口径13.4cm、器高4.7cmを測り、天井部が高く丸みを帯びた形態を示す。陶邑編年T K 47併行期と考えたい。2～3は須恵器蓋杯類である。周溝埋土中から出土しているが、この古墳に直接関連するものではない。4～6は奈良時代の須恵器である。古墳の最終的な埋没時期を示す資料といえる。7は須恵器壺の口縁である。8～9は布留式の土師器甕である。下層遺構からの混入遺物であろう。10は瓦器碗である。古墳の周溝から出土しているが、直接的な関係はない。内面にのみミガキがみられる。この地区でも新しい段階の資料である。

S D 13(11・12) 11は土師器甕である。布留式併行のものである。12は縄文土器鉢の口縁細片である。外方に屈曲した口縁に刻目を施す。これらの遺物が、この溝の時期を示しているか不明である。

S D 04(13) 13は土師器甕である。混入遺物の可能性が高い。飛鳥時代以降のものとみられる。

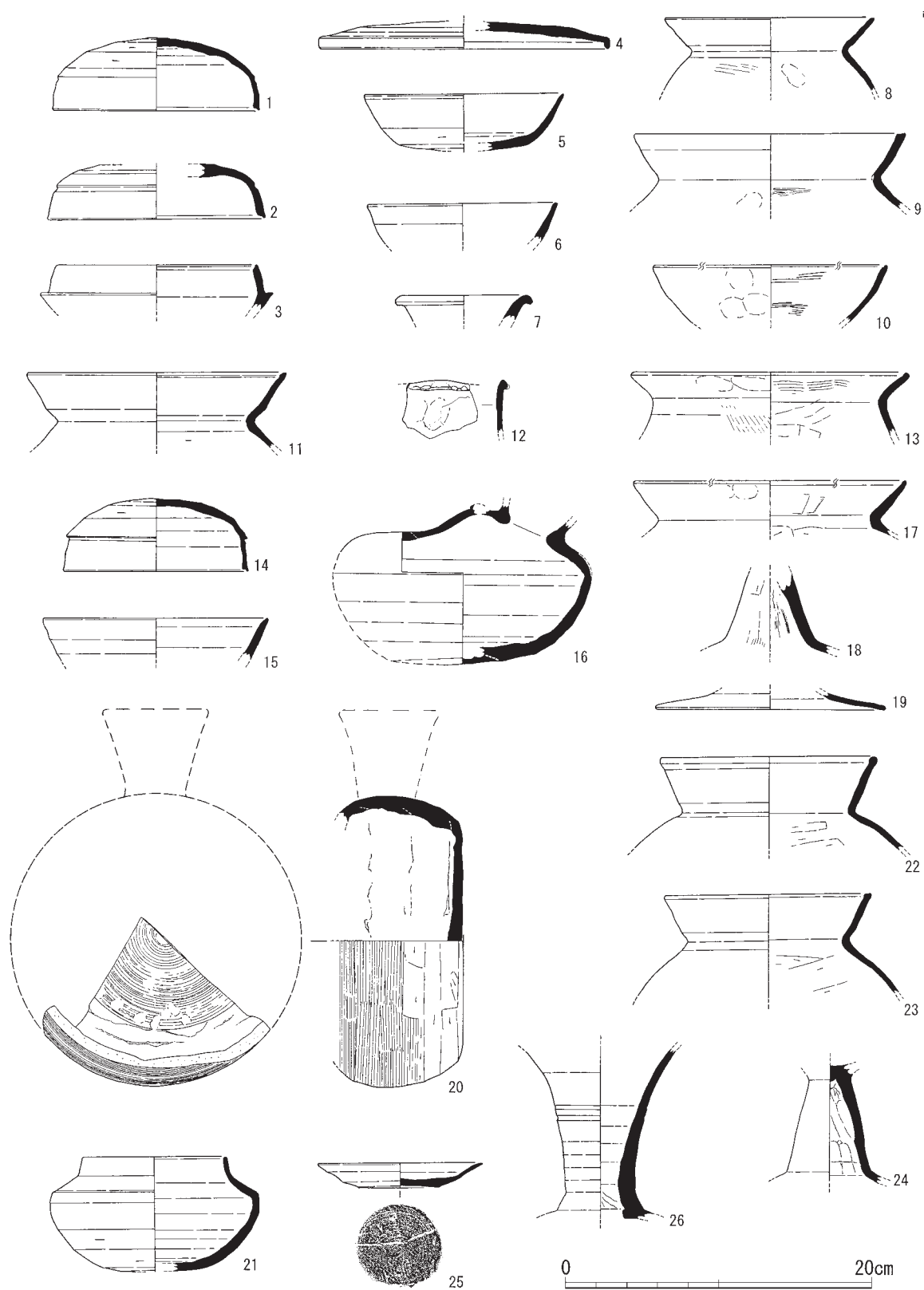
時塚13号墳(14～19) 14はS D02から出土した須恵器蓋である。この古墳の築造時期を示す資料と考える。口径12.0cm、器高4.75cmを測る天井部が高く、丸みを帯びた形態をとる。稜や、口縁端面の段も明瞭であり、天井部の回転ヘラケズリも範囲が広くていねいに行われている。陶邑編年T K 23もしくはT K 47形式に併行するものと考ええる。15はS D02出土の布留式段階の土師器甕である。16はS D03出土の須恵器平瓶である。溝の中層から出土しており、埋没過程での混入品とみられる。17～18はS D03出土の土師器である。いずれも下層遺構の混入遺物とみられる。

S D 08(20・21) 20は須恵器提瓶の体部である。S K 14の出土遺物と接合関係にあり、両者は同時期に機能していた遺構とみられる。外面にカキメが施されている。21は須恵器短頸壺である。肩部に沈線をもち、口縁はやや内傾する。

竪穴式住居跡S H 07(22～24) 22は甕口縁である。摩滅のため調整が不明瞭である。口縁はやや直線的につくられ、端部の肥厚は丸みを帯びている。23は口縁端面が水平面を形成しており、わずかに内面に肥厚する。両者とも薄手のつくりである。24は高杯の脚柱部である。中空の脚柱であり、残存高7.8cmを測る。これらの遺物は布留2式段階に併行するものと考ええる。

包含層(25・26) 25は土師器皿である。床土直下から出土している。26は須恵器長頸壺である。S D01とS D02の間の包含層中からの出土である。

(筒井崇史・石崎善久)



第137図 L2地区出土遺物実測図

(4) L3地区

L3地区は、L2地区の北側の用水路部分に設定した南北方向に長い調査区である。この地区では調査区南側で、2基の方墳とそれを切る建物群を、調査区の北側ではピット群を検出した。以下、古墳時代の遺構と、それ以降の遺構に分けて概要を報告する。遺物については出土量が少ないため、まとめて報告を行う。

1) 古墳時代の遺構・遺物

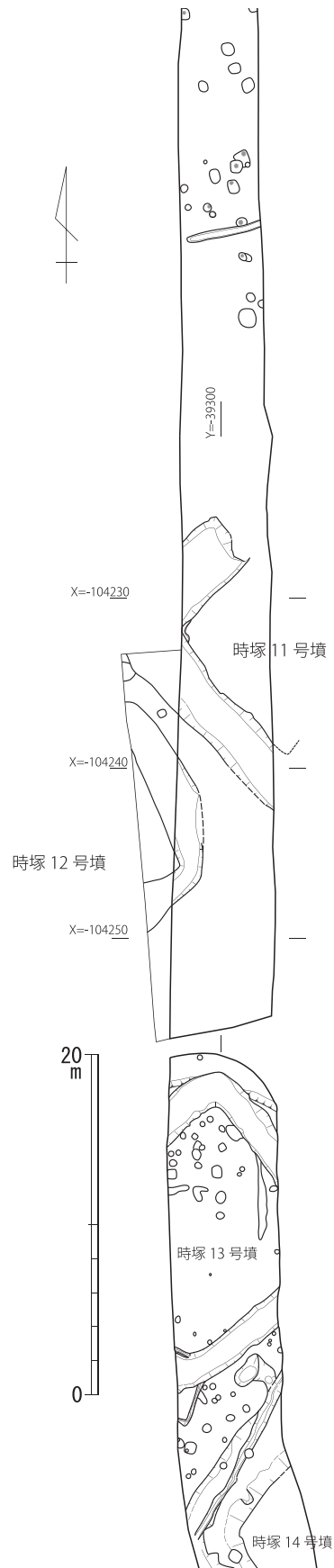
L3地区では古墳時代の遺構として、2基の方墳を検出した。なお、調査区南西部は排土置き場確保のため、床土を除去したところ、古墳周溝およびピットなどが露出したため、検出状況の平面図作成のみを行っている。

時塚11号墳(第139図) 調査地南東部で検出した方墳である。「L」字状に屈曲するSD29を検出し、これを古墳の周溝と判断した。

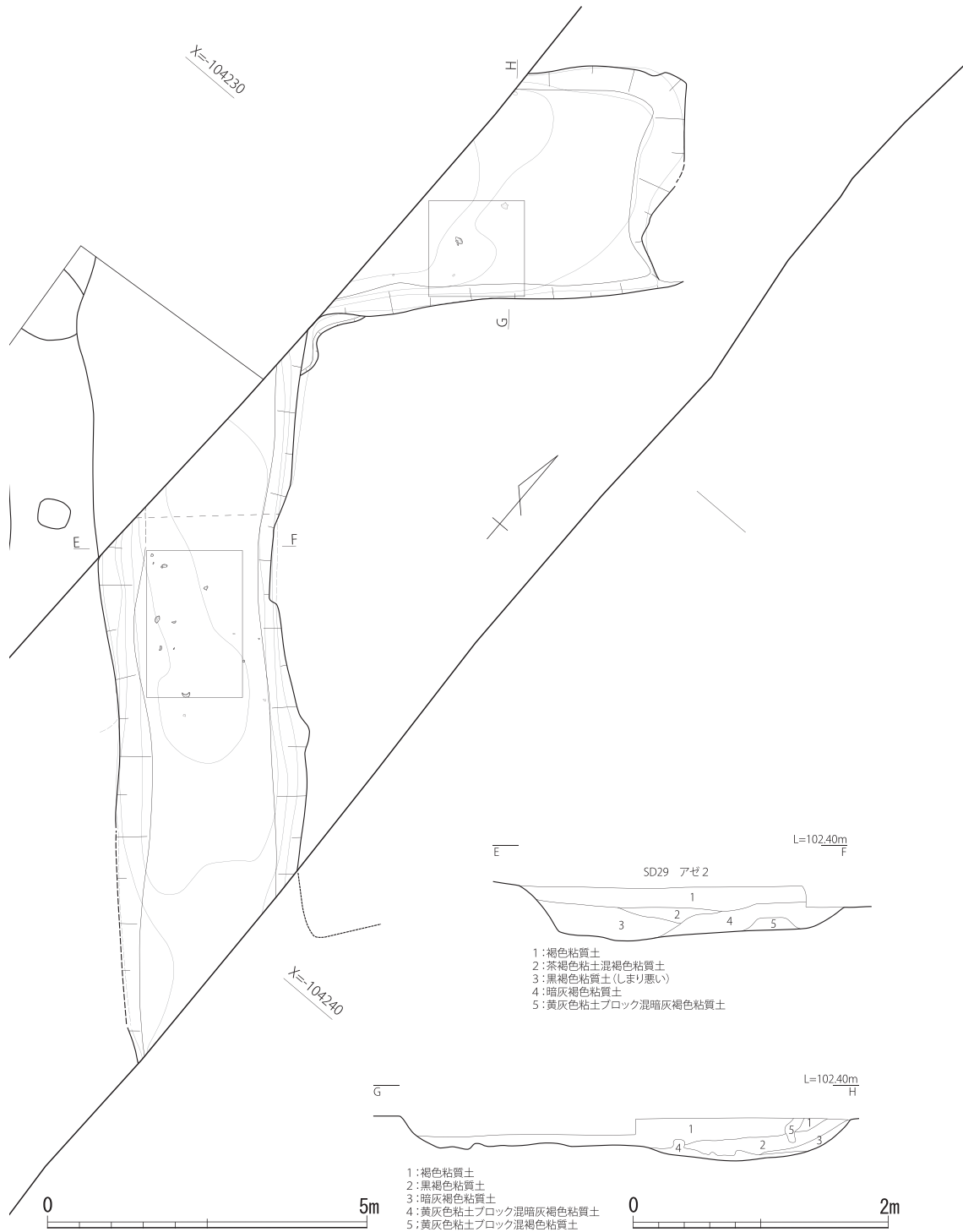
周溝は、西側で幅3m・深さ0.4m、北側で幅3.5m・深さ0.4mを測る。また、北側の周溝は完周しておらず、途中で途切れている。これが、築造当初より、この部分が浅く掘削されていたのか、あるいは陸橋部のように途切れていたのかは明確ではない。周溝の断面形は北側周溝、西側周溝ともほぼ逆台形を呈しているが、周溝外周側がわずかながら深く掘削されている。また、埴輪・葺石などの外部表飾施設や埋葬施設は確認されていない。

墳丘の規模は基底から東西6.5m以上、南北方向については墳丘の南西隅を周辺部の清掃中に部分的に検出しているため、約10.5m程度を測るものと考えられる。主軸方位は、時塚13・14号墳と同様、約45°西へ振っている。

遺物は北側周溝および、西側周溝内から須恵器が出土している(第140・141図)。西側周溝からは須恵器杯身(2)・杯蓋(1)・甕(5)が出土している。いずれも破片化した状態で検出されているが、大部分のものが接合関係にあり、位置関係から墳丘外からの転落もしくは遺棄によるとみられる。また、周溝掘形より若干遊離した状態で検出されているため、これらの須恵器は、周溝が一定埋没したのちに溝内に転落、もしくは遺棄されたものと判断する。その他、埋土中から須恵器



第138図 L3地区検出遺構配置図
(古墳時代、1/400)



第139図 時塚11号墳実測図(平面：1/400、断面：1/50)

蓋細片(3・4)が出土した。

北側周溝では須恵器高杯(6)、須恵器壺(7)などが検出された。高杯はほぼ完形に近い状態で検出され、出土状況からは墳丘からの転落による可能性が高いものと判断された。須恵器壺についても、ほぼ同一地点からの出土であり、墳丘からの転落の可能性が高いものと判断された。



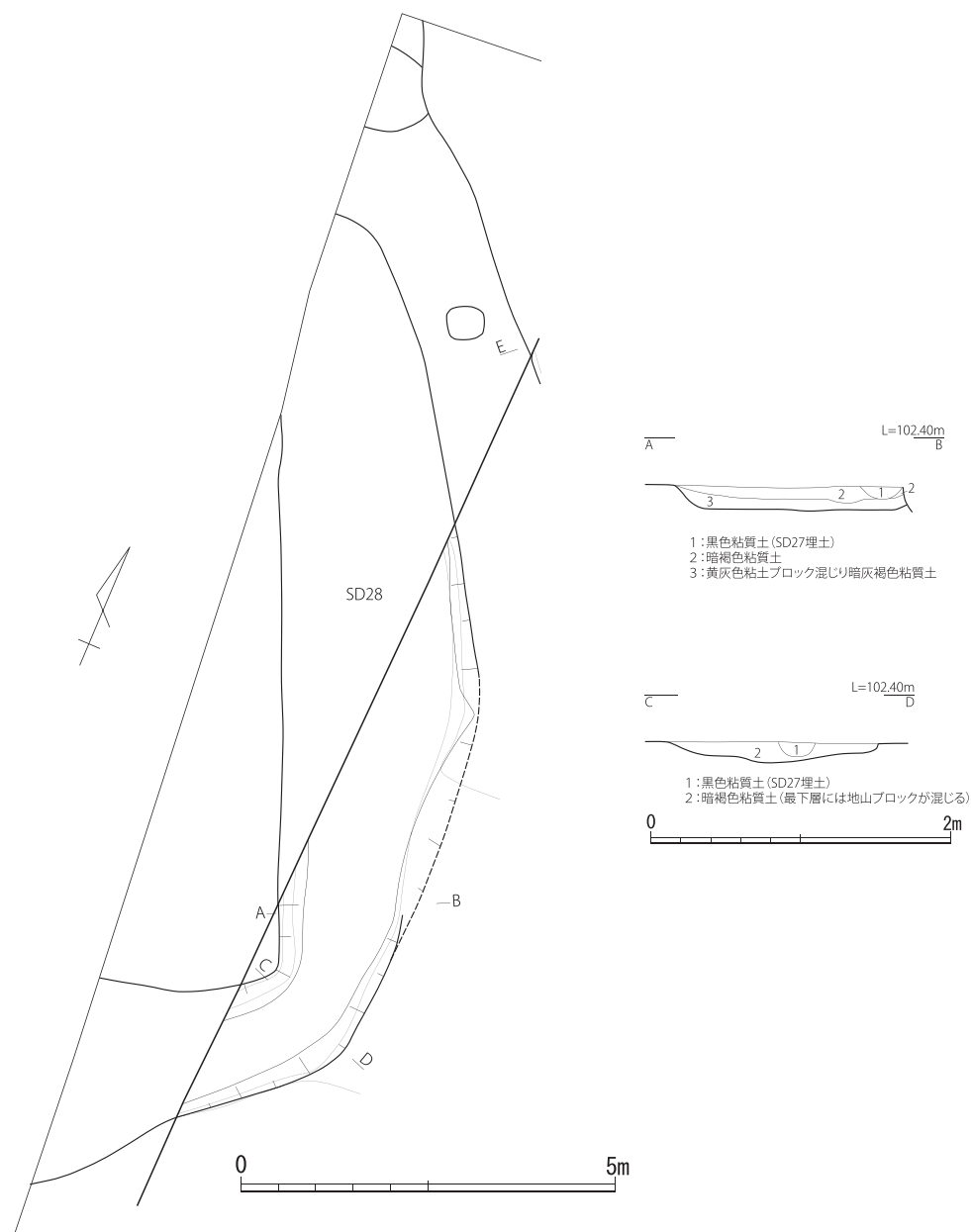
第140図 時塚11号墳遺物出土状況図(1)(1/20)



第141図 時塚11号墳遺物出土状況図(2)(1/20)

時塚12号墳(第142図) 調査区南西部で検出した「L」字状に屈曲するSD28を方墳の周溝と判断した。古墳の墳丘および周溝の大部分は調査区外であり、全容をうかがうことはできなかった。また、周溝の一部は排土置き場で平面形のみを検出している。葺石や埴輪などの外表施設はなく、盛土、埋葬施設も検出することはできなかった。墳丘の主軸は北からやや西に振るが、時塚11・13・14号墳に比べると、やや北に向く形となる。

周溝は東側で幅2.5m・深さ0.15m、南側で幅1.5m・深さ0.12mを測る。時塚11号墳より周溝が浅い。また、東側周溝の東掘形は中央部分が東側にふくらんでおり、墳丘に平行していない。調査区西側の排土置き場で周溝外周の屈曲部を平面的に検出することができた。この検出状況などから、古墳の墳丘規模は東西3m以上、南北約10mの規模をもつ方墳であると推定される。東側周溝の断面形は逆台形を呈し、明確な墳丘基底部を削り出している。一方、南東隅部分では皿状



第142図 時塚12号墳実測図(平面：1/100、断面：1/50)

を呈し、明確な基底部を削り出していない。

遺物は、周溝埋土中から土師器甕(11)が出土しているが、周溝床面より遊離した状態で検出されている。出土状況からは墳丘側からの転落か、墳丘外からの転落あるいは遺棄なのか判断することはできなかった。また、混入遺物である可能性も考えられるため、この土師器甕がこの古墳の時期を示すものとは断定できない。

(松尾史子・石崎善久)

2)奈良時代以降の遺構・遺物

A. 検出遺構

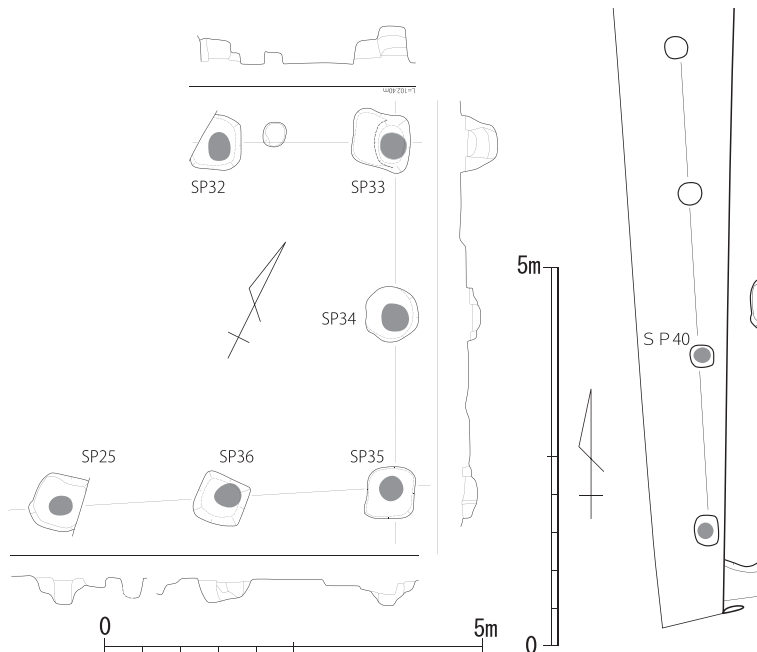
L3地区では古墳の周溝埋土上を中心に奈良時代以降の遺構・遺物を検出した。特に南半部で遺構の密度が高い。以下主要なものについて概観する。

掘立柱建物跡S B01(第144図左) 調査区の南で検出された掘立柱建物跡である。S D27に切られている。主軸を北から西に振る。東西2間(4.3m)以上、南北2間(4.5m)の規模をもつ。総柱の建物跡にはならず、おそらくは東西棟の掘立柱建物跡とみられる。

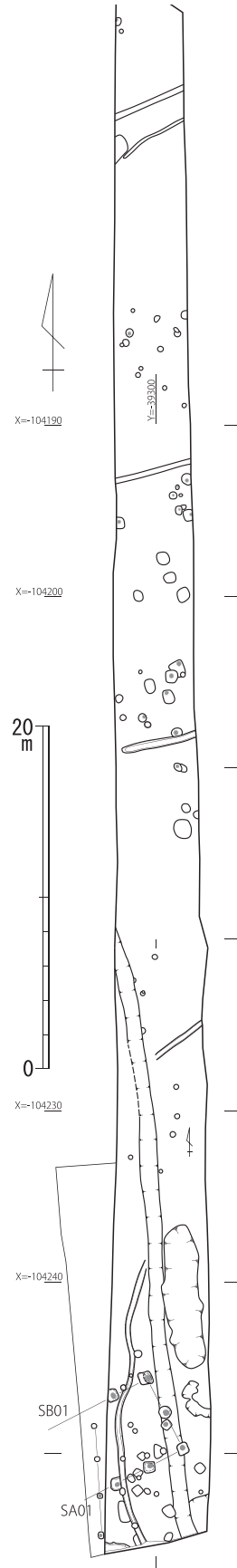
建物を構成する柱穴は平面方形もしくは不整方形を呈し、断面形では、柱を据え付けるために底面を一段深く掘り込む形態のものが多く。柱穴の規模は一辺0.6~0.8m、深さ0.2~0.5mを測る。検出した全ての柱穴から柱痕跡を検出した。柱痕跡からこの建物には径30cm前後の柱が使用されていたものと考えられる。

S P25から土師器甕(12)が、S P34から製塩土器(13)が出土している。奈良時代後半の建物跡とみられる。

S D27 調査地南半部をやや蛇行しながら南北方向に主軸をとる幅0.2m、深さ0.2mを測る素掘り溝である。掘立柱建物跡S B01を切っており、この調査区の中では新しい段階に属する遺構



第144図 掘立柱建物跡S B01、柵S A01実測図
(1/100)



第143図 L3地区検出遺構配置図
(奈良時代以降、1/400)

である

柵S A01(第144図右) 調査区外ではあるが、南北方向に並ぶ柱穴群を排土置き場で検出した。平面のみの検出と、露出した遺物の記録、取り上げ作業のみを行っているため、柱穴の深さなどについては不明である。南北3間(6.4m)分を検出した。遺物はS P40から瓦器碗(21)が検出されている。

以上の遺構のほかに、この調査区では南半部分を中心に多数のピットを検出しているが、建物を復原するには至らなかった。遺物を図示した土坑やピットは第145図に番号のみで示した。

また、北から約45°東に主軸をとり、調査区を斜行する素掘り溝を複数検出しているが、これらは近・現代の耕作に伴う溝であると判断された。

(岡崎研一・松尾史子・石崎善久)

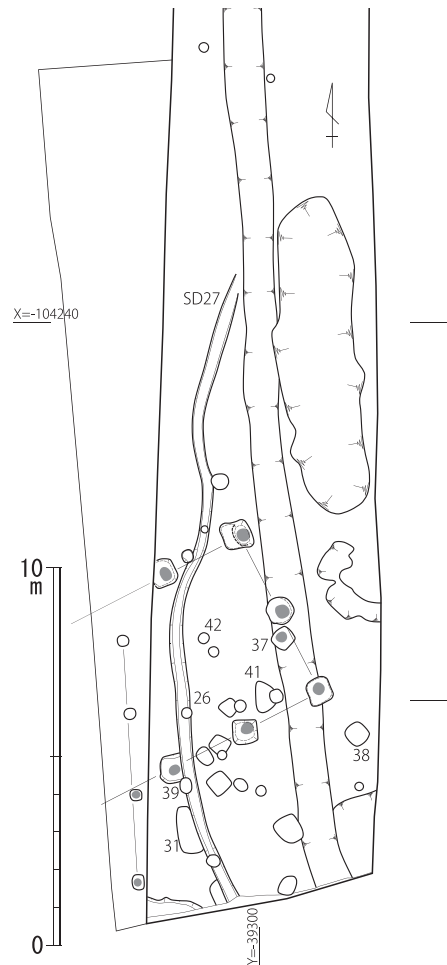
B. 出土遺物(第146図)

L3地区の各遺構出土遺物を図示した。以下、遺構ごとに概観する。

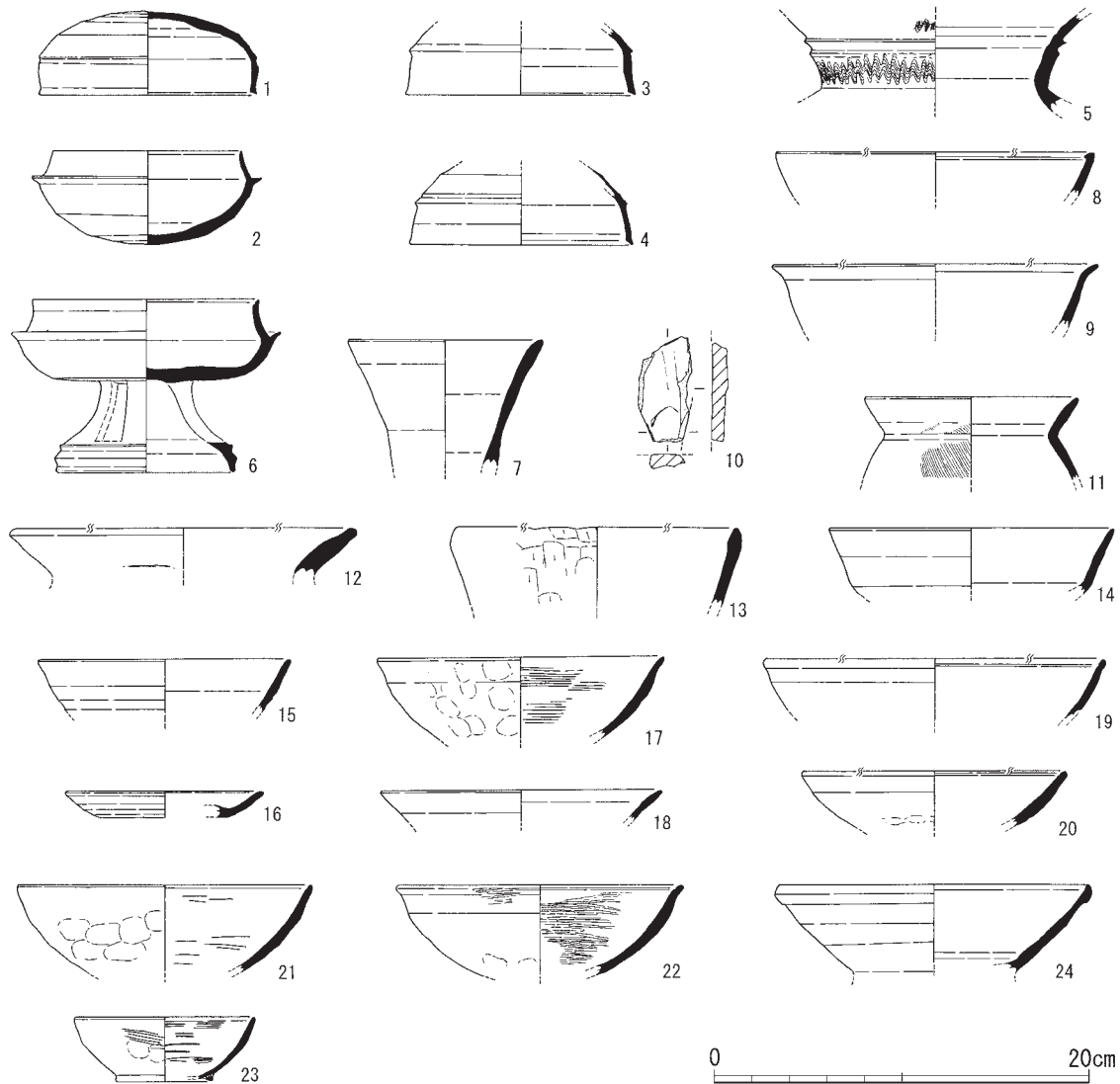
時塚11号墳(1～10) 1・2・5は周溝外から周溝SD29に転落した遺物とみられる須恵器である。1・2はセット関係とみられる須恵器杯身・杯蓋である。両者とも内面に赤色顔料が付着する。天井部や底部は丸みを帯びた形態をとるが、蓋の稜はやや退化し、杯身の口縁もやや面をなすだけの新しい要素がみられる。陶邑編年TK47型式からMT15形式に併行する段階のものとする。5は須恵器壺の頸部である。2条の突帯を削り出し、下部に波状文を施す。6・7は墳丘からの転落遺物であり、本墳に伴うものである。6は短脚有蓋高杯である。三方にスカシをもつ。杯部は復原口径が12.0cmを測る大形品であり、陶邑編年MT15形式に併行する地方窯産の須恵器と考える。7は須恵器壺の口縁である。3・4・8・9・10はいずれもSD29の埋土中からの出土遺物である。8は布留式段階の土師器甕口縁片、9は須恵器の碗であり、この古墳の埋没年代を示す資料と考える。10は粘盤岩製の砥石片である。

時塚12号墳(11) 図示できるものはこの土師器甕のみである。直線的に延びる口縁をもつ。外面は縦方向のハケにより調整される。古墳時代中期後半から後期前半頃の年代を考えたい。この古墳の築造年代を直接示す資料ではないと判断する。

掘立柱建物跡S B01(12・13) 12はS P25掘削中に出土した土師器甕片である。大きく外反する厚手のものであり、奈良時代後半以降に属すると思われる。13はS P34出土の製塩土器である。外面は荒いケズリにより調整される。



第145図 L3地区南半部遺構配置図
(奈良時代以降、1/200)



第146図 L3地区出土遺物実測図

S K 31(15・16) 15は須恵器の杯身片である。16は土師器皿である。

S P 39(17~20) 17は瓦器碗である。内面に横方向のミガキがみられる。18は土師器の皿とみられる小片である。19は須恵器碗である。口縁内端面に沈線を施す。20は土師器碗である。浅い形態を呈する。

柵 S A 01(21) 柵を構成する S P 40出土の瓦器碗を図示した。深い形態を呈し、内面は横方向のミガキ、外面はユビ押さえが観察される。口縁内端面に段を形成する。

S P 42(22) 22は瓦器碗である。内外面ともミガキが観察される。

S P 43(23) 23は小型の瓦器碗である。内外面にミガキを施し、高台は外方に開き、断面台形を呈する。

包含層(24) 24は白磁の碗である。復原口径16.2cmを測る。碗外面には上から2/3程度のみ施釉される。

(松尾史子・石崎善久)

京都府遺跡調査報告集 第135冊

平成21年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141